

記録
16ミリ
カラー／34分
日・英語版

■企画
(財)ポーラ伝統文化
振興財団

スタッフ

■製作
村山和雄
■演出・撮影
村山和雄
山屋恵司
■脚本・構成
大島善助
■音楽
長沢勝俊
■照明
浅見良二
本橋俊男
■編集
中根信也
■解説
相川 浩

文部省選定
日本映画ペンクラブ推薦
1990年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞
第34回日本紹介映画・ビデオコンクール金賞

〔監修〕
金沢美術工芸大学教授 柳橋 眞

〔協力〕
輪島市 輪島市漆器研究所 石川県立輪島漆芸技術研究所
輪島漆器商工業協同組合 島口慶一

〔重要無形文化財輪島塗技術保存会会員〕
椀木地……北浜 保 辻 義男 小崎清人
曲物……山下博之
指物……奥野秀次 高柳修一
朴木地……田中宗太郎
髹漆……塩多慶四郎 宮腰 強 後藤孝一 徳野宗林
中浜儀太郎
呂色……大橋良夫 加本康夫
蒔絵……張間麻佐緒 坂本正春 小森克巳 田崎昭一郎
沈金……三谷吾一 古今菁峰 舟掛道雄 板谷光治
学識経験者……松平昌平 五嶋耕太郎 塩安誠治

〔重要無形文化財保持者〕大場松魚 松田権六（故人）

この作品は、輪島塗の技術を後世に伝えるための技術記録として、輪島塗技術保存会が作った極めて高度な技術を要する懸盤（かけばん）や椀・皿などの一式（計14点）の工程を詳細に記録したもので、輪島塗にかかわる技術者たちにとって、今後貴重な映像資料となる作品である。



日本の代表的な漆器である輪島塗の技術は、昭和52年に重要無形文化財の指定を受けて以来、輪島塗技術保存会の会員たちによって技術の伝承と発展がはかられて今日に至っている。輪島塗の技術は、木地作り、塗り、加飾と総合された幅広い技術で、それら各々の業

種で30年以上の経験と技術を持った会員の人々によって構成されている。昭和61年の総会では、20世紀の最後を飾る事業として輪島塗の最高の作品を保存会の会員参加で制作することを決定した。最も高度な技術を要求される懸盤一式の作品は、足掛け5年を経て、平成2年（1990年）3月完成した。漆器の良し悪しは木地作りできまるといわれるが、特に今回の作品では永久保存を考えて新しい木地作りの工夫もされている。

まず懸盤の制作工程——①作品の1000年以上の保存を考えて、素材には木曽の檜が使われた。懸盤の命は、盤や足の曲線部分の美しさで決まるといわれる。豆カンナ、ノミ等、様々な道具を使いわけながら、曲線の微妙さをとらえていく。②同様に椀も木地作りが終わると、椀木地固めにかかる。椀の曲線に密着したヘラで外側も内側もまんべんなくたっぷりと漆を塗って固めていく。③摩耗の激しいフチや高台の部分に布着せを行ない、黒目漆（くろめうるし）を使った中塗（なかぬり）は、塗り、乾燥、研ぎの工程を何度も繰り返していく。④曲物師（まげものし）による汁を入れる湯桶の制作——飯鉢のフタは、幾重にも曲げ輪を重ねて作られ、湯桶のヒシヤクの柄も5枚重ねで作られている。⑤懸盤の上塗（うわぬり）は、ホコリや風をよせつけないよう、特別の塗部屋を使う。塗り師は、刷毛の手を休めることなく一気に塗っていく。この後、回転風呂で乾燥させる。⑥表面を研ぎ炭でなめらかにし、生漆（きうるし）を綿につけて拭いて漆の肌をしめ固める呂色磨き（ろいろみがき）。広い鏡板は手のひらで、細かなところは指先で磨き上げる。これも、風呂での乾燥、研ぎ、磨きと数回繰り返されて漆のつやがあがってくる。

こうして木地作りから100をこえる工程を経て黒漆の懸盤一式が完成した。⑦次は、蒔絵と沈金（ちんきん）が一体となった作品の加飾の作業——ベンガラ漆で花びらを描き、金粉をまく、粉蒔き（ふんまき）を行なう。そしてこの上から漆を塗り込み金粉を定着させ、油砥粉（あぶらとのこ）で磨いた後、呂色磨きで磨き上げて沈金の工程に移る。⑧沈金にはいくつかの方法があるが、今回は立体感を表現できる点彫りが選ばれた。すくい上げるようにして点を並べ、この上から漆を塗り込み、点のただけに漆が残るように拭く。そして真綿に金粉をつけて菊の花を浮かび上がらせる。このようにして檜椀地懸盤一式（ひのきそじかけばんいっしき）、檜椀地黒塗懸盤一式（ひのきそじくろぬりかけばんいっしき）、檜椀地沈金蒔絵菊文懸盤一式（ひのきそじちんきんまきえきくもんかけばんいっしき）が完成した。

